

医療法人 聖志会 渡辺病院  
稲山靖弘 渡辺浩年

【はじめに】今回我々は、施設入所に際し、不穏となり認知症のBPSDと間違えられるも、精神療法のみで治癒したPTSDの一例を経験したので若干の考察を加えて報告する。

【症例】90歳代、女性、PTSD。

【主訴】怖い、怖いと怯える。

【生活歴】8人同胞の第3子として出生。高校教師を定年後、自宅で塾を営んでいた。

【現病歴】X-2年、災害対策のため自宅の大規模修理中、他府県の長女宅へ引っ越した。しかし、長女の入院手術のため近隣の施設に入所したところ「わー、わー、殺される」と泣くため退所となり、近医に認知症と診断されドネペジル、抗うつ剤を処方された。その後も「連れ戻される」と泣くため、X年10月当院外来を受診。

【現症】「うー、うー」と呻きながら、車椅子から身体を仰け反り「わからない、眠れない」「災害で家を修理している、娘のところに引っ越してきた」という。HDS-R:23点、SDS:70、頭部CT:脳萎縮軽度、脳SPECT:異常所見なし。

【治療経過】ドネペジルと衝動性の予防のため抗うつ薬を中止した。週1回、30分間の支持的精神療法を開始した。数回、面接をすると「老人ホームで大風呂で裸になって順番を待たされた」「嫌いな食事を早く食べろといわれ苦痛だった」といった。その後、HDS-R:30、SDS:54となった。その後も、毎週一回約30分間の精神療法を継続、「老人ホームのことは、今の日本ではしかたがないとおもう。許す」という。最近ではデーサービスに行くようになり、長女と静穏に会話できるようになった。

【考察】、本症例は、当初アルツハイマー型認知症のBPSDと思われたが、引越し、長女の入院、初めての老人ホームへの入所が、契機となったPTSDと思われ、受容的支持的な精神療法が著効した症例であった。